

高貴な粘液

たくぎ よしみつ
鐸木能光

／＼

「小高さん、あれ！」

船の舳先のほうに乗っていた沢野が、水面を指差しながら叫んだ。

カメラマンの横井が、反射的にビデオカメラに手を伸ばす。

見ると、船の右手前方を、何かが、まるで船を先導するかのよう

に泳いでいる。「こんな奥地にまでいるんですね。もう、ずいぶん分け入った

と思っていたのに、この分じゃあ、目的地はまだまだ先ですかね」

舳先付近に移動した私の隣に寄ってきて、沢野が耳打ちした。大声を出さないのは、撮影を開始した横井のビデオカメラの内蔵

マイクに、声が入らないようにという配慮からだ。

船を先導する陽気な生物は魚ではなかった。

アマゾンカワイルカ。

世界中に四種いる淡水棲のイルカの一つだそうだが、川でイル

カに出合うというのは、どうにも不思議な気がする。

私たちはテレビのドキュメンタリー番組を撮るために、世界第三の大河・オリノコ河を遡っていた。

流域面積世界一のアマゾン河の場合、河口の河幅が三百二十キロあり、四千キロ遡ってもまだ十キロ近い河幅を誇る。オリノコ河はそれには及ばないものの、巨大なことに変わりはなく、イルカを眺めていると、ここが河なのだということはどうしても忘れてしまいそうになる。

イルカたちはしばらく船と並走するように泳いでいたが、やがてどこかへ姿を消した。

カワイルカ類はマイルカなどに比べると脳の大きさが半分以下だが、離の数はあまり変わらないとか、揚子江に棲むヨウスコウカワイルカは生存数が二百にも満たず、絶滅は時間の問題だというようなレクチャーを、私はすでに沢野から何度か聞かされていた。

横井がカメラを再び防水ケースに戻すのを見届けてから、私はガイド役のカルロスに訊いた。

「まだ大分かかるのかな」

「オーライ、オーライ。あと三日のうちには着くよ」

カルロスは甲板に寝そべったまま、私より下手な英語で答えた。二日前に町を出たときにも「三日のうちには」と言っていた。

河はどこまで遡ってもあまり景色が変わらない。一体どれくらいの距離を進んだのだろう。

私は諦めて、ポケットから雛くちやになったラッキーストライクのパッケージを取り出し、一日の割り当て本数三本のうち、二本目に火をつけた。

この取材旅行が終わるまでに禁煙するつもりで、最初からあまり持参しなかったのだが、果たして成功するだろうか。

「小高さん、こういうジャングルは初めてですか？」

コーディネーターの沢野が言った。

「アマゾンに初めて行けど、ボルネオのジャングルに入ったことはあるよ。あれはすごかった」

「ボルネオっていうと、オランウータンか何かを撮りに？」

「いや、元日本軍の通信兵が、あそこの奥地に有尾人ゆうびじんがいるって話を耳長族の長老たちから聞いたって言うんでさ、『幻の有尾人を求めて』とか何とかって言う番組をね、計画したわけさ」

「ユウビジョン？」

「しつぽがある人間って意味。類人猿じゃないよ。人間なだけれど、しつぽがあるわけね」

「そりゃすごいや」

「すごいだろ。いれば世紀の大発見さ」

「でも、幻は幻のまま終わってしまった……と」

「そう。耳長族の集落まではたどり着いたんだけど、そこでもそんな話が出なかったね。仕方ないから『幻の耳長族を求めて』って番組に変更してさ、耳長族は昔から有名で、幻でもなんでもないんだけどね、しゃあないよな」

「オランウータンにしつぽくつつけて撮影しちゃうとか、何かすればよかったのに」

「実際そういう意見もあったよ。学者は最初からそんなものは生物学上考えられないって言ってたんだよね。その時点で何か仕込みでもしないと番組としては成り立たないという予感はしてたんだけど、いざ、物すごい自然の中に入ってみると、そんなセコイヤラセは馬鹿らしくなっちゃうんだよね」

私は数年前の、やはりハードな取材を思い出していた。ヒルに身体中吸いつかれるし、原因不明の高熱は出るし、下痢は止まらないしで、本当に死ぬかと思った。

大学では探検部の主将を務め、高山から砂漠まで、一通りの冒険を経験してきた私も、いつしか結婚もせず四十代の半ばにさしかかろうとしている。そろそろハードな取材は遠慮してプロデューサー的な仕事に回ろうかとも思っていたのに、結局はこうしてジャングルの本家とも言うべきアマゾンに来てしまっている。正確にはアマゾン河よりも千キロ以上北、ベネズエラを二分するように流れるオリノコ河を遡っているのだが、目指す目的地はブラジルとの国境付近に広がるジャングルだから、広い意味でアマゾンと言ってもそれほど差し支えはないだろう。

オリノコ河は中流以下がりヤノスと呼ばれる草原地帯なのだが、私たちはジャングルが始まるあたりまでは飛行機で入ったので、この河の下流域の表情は間近には見ていない。

今回の本当の目的はオリノコ河を撮ることではない。この河の源流近くに住むというチシツメリ族、別名「笑顔族」という部族と接触することだった。

チシツメリ族はほんの十人から二十人程度のグループでジャングルの中を移動している採集民族だという。なぜかいつも笑顔を絶やさず、「生まれるときも、寝るときも、死に顔さえも笑顔の部族」などと呼ばれているとも聞いた。

私がこの部族の存在を知ったのは、イギリスのあるドキュメンタリー番組のビデオでだった。日本では放送されておらず、イギリスに住んでいる友人がビデオを送ってくれた。

映像はわずか数分間だったが、そこに登場した全裸の部族は、確かに終始笑顔を絶やさない。その笑顔の不思議さになぜか無性にひかれてしまい、企画会議でこの部族との接触を試みるドキュメンタリー番組を提案してしまったのだ。

部長から、「小高君、提案者の君が行くんだらう？」と言われたときは、一瞬、いつかのボルネオでの悲惨な体験を思い出した

が、結局断れなかった。言い出しつぺの責任というよりも、彼らの笑顔の秘密を知りたいという好奇心が強かったのだと思う。

もつとも、ボルネオの有尾人のように雲を掴むような話ではないものの、チシツメリ族に出合える自信はあまりなかった。実際にいることは確かなのだろうが、なにしろアマゾンには、未だ我々がまったく存在を知らない未接触部族も多数いると言われている。

しかも、ビデオを送ってくれた友人の手紙によれば、このビデオを撮影した取材班の一人は行方不明になったまま戻らなかったのだという。ビデオにも一瞬映っている、金髪の、笑顔が魅力的な美学生物学者が、パーティーが引き上げる寸前に忽然と消え去らしい。かなり捜したが、遺体も遺品も見つからなかったそうだ。あまり気持ちのいい話ではない。

「本当に大丈夫なんだろうな」

私はもう一度ガイドに念を押した。

「オーライ、オーライ。でも、連中は絶えず移動しているからね。ワシも実際に会ったことはないのよ。会えればラッキーね」

カルロスは笑顔族のような明るい笑顔でそう答えた。

∟∟∟

町を出発して一週間経った。

川を遡っているうちは、食料はもっぱら捕れた魚だった。味も素晴らしく、毎日食べても飽きなかった。

船を降りる頃までに飲料水を半分近く使ってしまった。帰りのことを考えると不安が募る。

ジャングルを歩くようになってからは、太い蔦を山刀で切って得られる水を飲むようにした。

蔦の切り口からは、まるで水道の蛇口のように透明な水がほとばしり出る。口を近づけて飲み、残りは水筒に入れる。これは植物が浄水器の役割を果たしているので安全だし、第一、用意してきた飲料水よりもはるかにうまかった。

珍しい動物や、河のほとりに住む人々の生活などはかなりビデオに収めたから、今引き返しても、それなりに番組は作れるだろう。しかし、ここまできたら意地でもチシツメリ族を映像に収めたい。

ジャングルに分け入って三日目のことだった。カルロスが大きな糞の山を発見して、興奮した声を上げた。

「これ、連中のウンコよ。まだ乾いてないね。連中、近くにいます証拠ね」

本当だろうか。

糞はきれいにとぐろを巻き、太さからいっても、かなりの大型動物のものには違いない。

「脇にティッシュでも落ちてれば、人間のものだって分かるんですけどねえ」

見事な糞のモニュメントにカメラを向けながら、横井が咳いた。その言葉の意味を理解したわけでもなかろうが、カルロスは糞の山のそばに自生している蔓性の植物を指差した。

よく見ると、蔓の一部に乾いた糞が薄くこびりついていた。「これ、チシツメリ族の特徴ね。サルはこんなことしないよ」なるほど、信用してよさそうだ。

私は、脱糞の後、蔓を尻にこすりつける図を思い描いた。

「痛くないのかね。めりこんだりして……」

沢野が言った。どうやら同じ想像をしていたらしい。

そのとき、十メートルほど離れた藪が揺れた。

みんな一斉にその方向を見た。

何か動いている。動物だとしたらかなり大きい。

横井はすかさずカメラを向けている。

緊張のひとつときが過ぎる。

現地人のポーターたちも、一様に顔に不安の色を浮かべた。

しかし、相手は姿を現さない。

「ダポポポプルルル……」

突然の奇声。

驚いた横井が、カメラを担いだまま危うく腰を抜かしそうにな

った。しかし、声を発したのは藪の中の相手ではなく、カルロス

だった。私たちは固唾を呑んで、カルロスの次の行動を見守った。

しかし、カルロスはそれ以上何も行動を起こさなかった。

やがて藪のほうから、小さな緑色の物体が飛んできた。

緑色の物体は沢野の頭にあたり、バウンドして地面に落ちた。

そばによって調べると、大きな木の葉で何かをくるんでいるよ

うだ。

私は恐る恐る木の葉の中身を調べてみた。

中身はまだ暖かそうな糞だった。

「ダポポポプルルルウルルウ」

カルロスが、今度は少し嬉しそうな調子で声を上げた。

「木の葉でくるんでいるね。これ、友好の印。顔を合わせたくな

い場合は、木の葉でくるまらずに、直接ぶつけてくるね」

「本当かいな」

沢野が、かぶっていた帽子をとって、「被害」がないことを確

かめながら言った。

何はともあれ、木の葉でくるまれていてよかった。

「それ、同じように投げて。早く」

カルロスが言った。

「何だって？」

「それ、投げて。こっちも友好の印、返さないと、行ってしまう」躊躇している余裕はなかった。私は思いきって、その木の葉でくるんだ柏餅状のものを掴み上げ、飛んできた方向に向かって投げ返した。

「柏餅」の落下地点付近の藪が揺れた。確認しているのだろう。

「ダポポポプルルウルルウルウ」

今度ははつきりと相手からの信号だった。

やがて、藪の上にひよこんと人懐こそうな笑顔が現れた。

間違いない。

顔つきはかなり違っていたが、彼は私がビデオで見たのと同じ種類の、あの不思議な微笑を浮かべていた。

私は感動のあまり、しばらくは声も出なかった。

気がつくと、頬のあたりの筋肉が緩み、自分もまた満面の笑顔を浮かべていることに気づいた。

しかし、周りを見渡してみると、笑っているのは私だけで、スタッフは全員、緊張した表情を崩してはいなかった。

∟ΠE

藪の中からは最初身長百五十センチほどの小柄な男が現れたが、私たちの背後にもう少し背の高い男が二人潜んでいたらしく、気がつくと、同じようにニコニコしながらすぐそばに立っていた。

私たち一行はスタッフの他にポーターが四人いて、総勢十人だったが、もしも彼らに敵意があれば、完全に背後から不意をつかれ、背中に毒矢の一、二本は刺さっていたかもしれない。

三人はニコニコするだけで何も言わず、私たちの前に立って歩き始めた。時折、ちゃんと後をついてきているかどうか確かめるように振り向く。振り向いた顔もやはり笑顔のままだ。

そんなふうにして、私たちはジャングルの奥へ奥へと誘導されていった。

カルロスは迷子にならないよう、立ち木に山刀で傷を付けながら歩いていた。

三十分歩いても、一時間歩いても、三人は時折笑顔で振り返りながら、どんどん奥へと歩いていく。

「まさかこのまま捕まえられて、鍋でゆでられたりはしないんでしょうね」

横井がぶつぶつと咳く。

私は、行方不明になったまま帰ってこなかったというイギリスの撮影班の一人、金髪の美人生物学者のことを思い浮かべた。

人懐こそうに笑いながら、「来客」をグツグツと煮込んで……？

まさかあの笑顔は、久しぶりにうまそうな食料を見つけたという喜びを表しているんじゃないだろうな……などと、本当に気が気でなくなってきた頃、私たちはようやく彼らの集落に到着した。

私たちが「友好の柏餅」を投げ合った地点から、すでに一時間半は歩いていた。あそこで出合わなければ、こんな森の奥深くの集落を捜し出すことは無理だったろう。私は改めて幸運に感謝した。

それは、集落というよりはほとんどキャンプに近いものだった。木や植物の蔓を使って建てられたごく簡単な小屋が二つ。

住民は、先導してくれた三人の男の他には、子供が五、六人と、彼らの母親らしい女が三人だけ。他にも外出中のメンバーが何人かいるのかもしれないが、それでも総勢二十人を超えることはなさそうだ。

男も女も、みんな全裸だった。

簡単なペニスサックや腰蓑のようなものも着けていない。ただ、刺青なのかボディペインティングなのかは分からないが、男女と

も胸や顔に様々な模様を描いている。

私たちはさつそく取材を開始した。

「リーダーは誰かと訊いてくれ」

私はカルロスにそう耳打ちした。

「そんなあ……ワシも会うの初めて。言葉なんか分からないよ」
カルロスは首を横に振りながら答えた。

「だって、さつき出会ったときは、あんなに見事にコミュニケーションしてたじゃないか」

「あの挨拶は爺様から話に聞いてただけね。あんなにうまくいくとは思わなかったよ」

仕方なく、私は荷物の中からチョココレートの箱を三つばかり取り出して、最初に顔を出した背の低い男に差し出した。名刺代わりというか、とにかく友好の気持ちを表したかった。

男はニコニコしながらチョココレートを受け取り、しきりに調べていたが、やがてゆっくりと私のほうに差し出して返そうとした。私は困って、ジェスチャーで「あげる」と伝えたが、もしかしたら食べ物だと分からないのかもしれないと思い、一箱を開けて、自分でゆっくりと一かけら食べて見せた。

彼は迷っていたが、ようやく決心がついたようで、真似して一かけら口に入れた。

もともと天真爛漫な笑顔に、困惑したような、驚いたような、あるいはさらに満足したような、微妙な表情が加わった。うまいと思ったのかどうかは分からないが、こちらの気持ちは伝わっただろう。

私は、残りの二箱と一緒にもう一度それを彼に押しつけた。

彼はようやく受け取り、それを他の仲間たちに見せに行った。

女たちは笑顔の中に戸惑いを、子供たちは笑顔の中に抑えきれない好奇心を混ぜながら、それぞれ集まってきたが、不思議に、

一種の余裕というか、威厳のようなものを崩さなかった。

我々の風体や装備を見慣れているとは思えないが、それほど驚くでも、神経質に反応するでもない。まるで隣村の親戚が久しぶりに遊びに来たのを出迎えるといった感じだ。

さらに不思議なことには、彼らは言葉らしきものをほとんど発しなかった。

子供たちは時折、子供特有の歓声や奇声を発するが、大人たちは仲間同士でもひたすら笑顔を交わすだけだ。

よく見ていると、その笑顔にも微妙な表情の違いがあり、それが言葉以上の意思伝達をしているようにも思える。

「すごい番組になりますね、これは」

横井が興奮気味に言った。

「生きて帰ればね」

私は再び行方不明になったイギリスの取材班のことを思い出しながら答えた。

CHAPTER

私たちは凶々しくも彼らの集落の外れにテントを張り、彼らと数日間生活を共にすることにした。

最初の夜から、私たちは彼らの心根の優しさに接し、感動した。夕方、狩りにいったらしい別の男二人が、サルを担いで帰ってきた。夜の献立は、そのサルの蒸し焼きだった。

集落の真ん中あたりで細長く火をおこし、それを囲んで夕餉ゆうげの支度をする。長円形のキャンプファイアといった感じだ。

私たちは少し離れた場所からカメラを回し、その様子を記録していたが、やがて焚火を囲む輪の一角が不自然に空いていることに気がついた。

見ると、いつの間にか私たちの人数分の木の葉に、取り分けたサルの肉が盛られ、その輪の隙間に並べられていた。

女たちがどこか恥ずかしそうな笑顔を私たちに向けている。まるで「何もおかまいできませんが……」と言っているようだ。

もちろん私たちは彼らの厚意を無にするようなことはしなかった。サルを食べるのは初めてだったが、焚火の中で真っ黒になっているサルの頭蓋骨はなるべく見ないようにして、私は極力うまそうな顔をしてその御馳走を口に運んだ。

淡泊で、どこかトリの笹身に似ている。

「それほど臭みもないし、いけるなあ、これ」

沢野は本当に気に入ってしまったようだった。

さらに感激させられたのは、私たちが土産代わりに渡したチョコレートが木の器に盛られて回ってきたことだった。

「食べ物是谁のものでもなくて、全員で分けるね。これ、森の民に共通する決まり」

カルロスが解説してくれた。

以後、私たちも彼らが見ているところでは、自分たちだけで物を食べないように気を配った。

∟∟∟

村での取材は順調に進んだ。

彼らは次第にうちとけてきて、二日目の夜からは自家製の酒をふるまってくれた。

薄くカラメルで着色したような色をしていて、かすかにとろみがある。

喉越しはすつきりとしていたが、その癖のなさが曲者で、実は強烈な幻覚症状を起こす代物だった。

器に一杯も呑むと大変なことになる。

沢野は「森全体が何かを語りかけてくるような気がした」と言い、横井は「小高さんがピンク色のペンギンに見えました」と言った。

私は、カルロスが突然テノールで「まあるい緑の山手線……」と歌うのを幸せな気持ちで見っていた。もちろんカルロスがそんな歌を知っているとは思えないから、これも幻覚、幻聴だったのだろう。

「あれは、マリファナの比じゃないですね」

翌朝、スタッフの中でいちばん若い植島がパンツを替えながら言った。どんな幻を見たのか、大量に夢精したらしい。

私は残念ながらマリファナを経験したことがないので分からなかったが、あの至福感を毎晩のように味わえたらどんなにいいだろうとは思った。

惜しむらくは、翌朝ひどい頭痛に襲われる。この欠点さえなければ優れたトリップ薬なのだが……。

もつとも、チシツメリ族は私たち以上に呑んでもみんなケロリとした顔をしているので、これは慣れの問題なのかもしれない。

狩りに向かうグループに同行し、毒矢を使った彼らの見事な狩猟テクニクをビデオに収めることもできた。

集落に残った女たちの生活もなかなか興味深いものがあった。そろそろ充電機用の軽油も底をつき始め、引き上げようかと話し合っていた三日目の夜、沢野が気になることを言い出した。

「あの酒だけどき、ここで造っているんじゃない気がするよね」
すかさず横井が言った。

「今日、村に残っているいろんなシーンを撮っていて気がついたんですけれど、知らないうちに一人がいなくなっているんですよ。それで夕方に女性が一人、酒の入った壺を頭の上のせてひっそ

り帰ってくるのを見かけたんですよね。昨日は別の男性が単独行動をしていた気がするし、どこか別の場所に、あの酒の醸造所のようなものがあるんじゃないですかね」

やがて議論の焦点は、あの酒の原料は一体何かということに移っていった。集落の中にはあの酒の原料となるようなものは見あたらなかったし、身振り手振りで酒の作り方を教えてくれと頼んでもみたのだが、彼らはただ笑っているだけだった。

彼らは何かを隠している気がする。原料はやはり植物だろうか。だとしたらそれは野生のものだろうか。もしかしたら、あの酒の原料を栽培している畑があるのではないか。

「あの酒の原料が栽培可能な植物だとしたら、煙草とかケシとか麻とかよりずっとすごい換金植物になるかもしれないわけですよ。ひよつとして、俺たちは世紀の大発見の入口に立っていたりして……」

沢野が目を輝かせながら言った。

「とりあえず、もう一日だけ滞在を延ばして、その秘密に迫ってみようか」

私はそう決断を下した。

∟∟∟

翌朝、私たちは分散して彼ら一人一人の行動を監視した。

まず男が二人、狩りの道具を持って出かけていく。私たちは黙ってそれを見送った。

女たちはその日はみんな別々の行動をしていた。

サルの毛皮で何やら巾着袋のようなものを作る者、ハンモックの補修をする者、乳房に絵の具で模様を描く者……。

そんな中で、女が一人、落ち着かない素振りを見せていた。

彼女は集落の中でもとびきりの美人で、私たちには最も人気があった。背が高く、まるで陸上競技の選手のような見事なプロポーション。乳房の形も崩れていない。

横井などは、「彼女にだけは、服を着せてみたいですねえ」などと、ため息混じりに言っていたものだ。

全裸の彼らを見慣れてしまいうちに、私たちの中にはいつしか着衣の姿こそがエロティックであるという感覚が芽生えていた。人間の性欲を刺激するものは裸体や性器そのものではなく、もう少し複雑な何かなのだろう。

私たちは彼女に的を絞り、わざと素知らぬ顔で、帰り支度を始めているかのように芝居をした。

やがて、彼女は小屋の奥から素焼きの壺を持ち出し、それを脇に抱えると小走りで森の中に消えていった。

私たちは気づかれないうちに後を追った。

彼女の足は異常に速く、私たちはすぐに姿を見失った。

カメラを持った横井がまず遅れ始めた。前夜例の酒を呑みすぎたらしい沢野も息が上がっている。

私は機材を持った他のスタッフをおいて、身軽なカルロスと二人だけで女の後を追うことにした。

カルロスは木々に山刀で印を付けながら飛ぶように歩いていく。私も必死でその後を追う。

しかし、一度見失った彼女の姿は、なかなか見つからなかった。カルロスはそれでも見当をつけながらジャングルを切り開くようにして進んだ。

どれくらい進んだらう。気がつくくと、周囲に今まで見たこともなかったシダ植物が目立つようになった。

そのシダは裏側にほのかなピンク色の胞子をつけている。葉はシダにしてはかなり大きく、地面から一メートルくらいのところ

まで生えている。

突然、前に行くカルロスが足を止めた。振り向いた顔には、かすかに恐怖の色が浮かんでいる。

「どうした？」

私は彼のそばまで行つて訊ねた。彼は黙つて周囲を見回していた。

私も真似をしてゆつくりと周囲を見渡した。私たちは、ジャングルの中に毛細血管のようにはびこつたシダの茂みの中にいた。一面、不思議なシダだらけだ。なんだか太古の地球にタイムスリップしたような気がする。シダの茂みの中から、トリセラトップスが顔を出しそうなムードだ。

「この草は何なんだ？」

私はカルロスに訊いた。

「分からない。ワシ、初めて見るね」

シダからほのかに独特の匂いが漂っていた。あの幻覚作用がある酒の匂いに少し似ていた。

もしかしたらこの植物があゝの酒の原料なのだろうか。

「旦那、このままだと道に迷うね。戻ろう」

カルロスが言った。

私も仕方なく同意した。

自分一人ではとても戻れる自信はない。ジャングル歩きには慣れているハンター歴三十年のカルロスが真剣な顔で「戻る」と言うのを聞いて、私は初めて背筋に冷たいものが走るのを感じた。

そのとき、少し離れたところからカサカサと草が触れ合う音が聞こえた。

私はその音のほうに顔を向けた。

シダの茂みの中を、あのチシツメリ族の女がゆつくりと歩いていくのが見えた。

頭の上にはシダの葉を詰めた壺を載せている。

女は普段よりもずっと幸福そうな笑顔を浮かべ、何かに憑かれたように歩いていく。耳を澄ますと、かすかに鼻歌のようなものも聞こえてきた。

私は女の後を追った。

女は、まるでジャングルの中に見えない線が引かれているかのように、まっすぐに歩いていた。

やがて、地面が上り勾配になり、小高い山のようになっている場所に出た。

突然、目の前から女の姿が消えた。

私は驚いて女が消えた場所まで小走りに進んだ。

女の姿はなかった。

だが、もちろん神隠しにあったわけではなかった。

よく調べてみると、シダの葉が重なり合った陰に、小さな洞穴ほらあなが空いていた。女はそこに入ったに違いない。

私は慎重に穴から中を窺った。

中は予想以上に広がった。

鼻腔を、甘酸っぱい匂いが刺激した。周囲のシダの匂いを数百倍に濃縮したような強烈な匂いだ。しかし、それ以上に私を驚かせたのは、洞窟どうくつの中がほのかに明るいことだった。

まるで間接照明で照らされたように、洞窟全体がうっすらと輝いている。よく見ると、壁面そのものが光っているようだ。

洞窟は奥に行くほど広がっていて、頭の上に壺を載せた女がゆっくりと奥へ消えていくのがぼんやりと見えた。

そのとき初めて、私はカルロスとはぐれてしまったことに気がついた。彼は女の姿に気がつかず、あのまま引き返してしまっらしい。

このままでは戻ることもできない。彼女と一緒になら村へ戻れ

るはずだ。

私は意を決して洞窟の中に足を踏み入れた。

途端にむっとした熱気と湿気に襲われた。まるでサウナに入ったようだ。立ち止まって目を凝らす。

光っているのは何だろう。発光性の地衣類？ それとも小型の蛍のような昆虫が無数にとまっているのだろうか。

壁に触れてみると、ねばねばしたものが指先に絡まりついていた。どうやらこの粘膜状のものが光っているようだ。

虫ではない。しかし植物だとも思えない。

それにしても強烈な匂いだ。決して不快ではなく、むしろ陶酔を誘うような妖しい匂いなのだが、まともに吸い込むと頭がぼろっとしてくる。

気絶しないうちにあの女を追わなければ……。

私はほとんど千鳥足になりながら奥へと進んでいった。

どうやら、いちばん奥は、広い部屋のようになっているらしい。壁面が発光しているとはいっても、蛍の光のようなはかなさだ。

かなたまで見通せるだけの光量はない。

しかし、次第に薄闇に目が慣れ、奥の部屋に出た途端、私の目の前には信じられないような光景が広がった。

部屋は直径十メートルほどの円形をしていて、床はなだらかな漏斗状にへこんでいる。中央部には小さな水たまりがある。

周囲の壁にはダストシュートのような穴が数メートルおきに規則的に開いていた。穴の直径は四十センチほどだろうか。その穴の入口から床に向かって、一際明るい光の筋が描かれている。

一見したところ、光る粘液状のものが壁の穴から染み出すように流れ出ている、それが床の中央部にたまり、水たまりを作っているようにも見える。しかし、水たまりそのものは光っていないし、そこにたまっている液体もさらっとして、光る粘液とは

別の種類のもののようにだった。

女は鼻歌を歌いながら、壺から取り出したシダの葉を一枚ずつ穴に投げ入れていた。ジャングルの中ではかすかにしか聞こえなかった鼻歌が、ここではエコーを伴って鮮明に聞こえる。

「ネキルト、バモスベ、ネチノト、バヨイベ……」

意味不明だが、実に美しい声だ。音階は古典的十二音階とは違っていて、さらに細かい音程を持っているようだ。微妙な音階なのだが、不思議と狂っているようにには聞こえない。一つ一つの音は実にしつかりとしている。前衛音楽のようにも聞こえるが、私はこれほどしつとりと心に響く前衛音楽を知らない。こんな心地よい音階があるのに、なぜ音楽家は今まで十二音階にこだわり続けたのだろうかと思議に思えるほどだ。

やがて女は部屋を一周し、すべての穴にシダの葉を入れ終わった。そして中心の水たまりのところまで降りていき、空になった壺に、そこにたまっていた液体を汲んだ。

その液体があのお酒だということはすぐに察しがついた。

しかし、壁面の穴の中はどうなっているのだろうか。あのシダが酒の原料だとすれば、それを分解して酒に変えるシステムが穴の中に存在することになる。

この高温多湿の状況の中でシダの葉が発酵するのだろうか。それとも穴の中に何か生物が潜んでいて、シダの葉を食べ、酒を分泌するのだろうか。だとすれば、ここはチシツメリ族の牧場のよきなものだということになる。

「牛」に相当する生物の正体は何だろうか……。

考えているうちに、女は酒を満たした壺を頭の上のせ、部屋を出ていこうとしていた。

「ねえ……」

呼び止めようとしたが、なぜかほとんど声が出なかった。

女は私のすぐそばを通り過ぎたのに、まるで私が見えないかのよう無視し、そのまま部屋を出ていった。

私は後を追おうとした。

が、足がもつれてその場に倒れ込んだ。

完全に酔っぱらってしまっている。泥酔した状態で、身体がいうことをきかない。

このままもう、この洞窟から出られないのではないかという思いが頭をよぎった。しかし、不思議に恐怖は感じない。

いや、恐ろしいどころか、心の中は言いようのない至福感に満ちていた。まるで、長い間求めていたものによろやくたどり着いたような充足感……。

母親の乳房を探り当てた赤ん坊のような……もちろんそんな気持ちは記憶に残っていないはずだが、もし自分が赤ん坊なら、まさしく今、私は柔らかな乳房にむしゃぶりついた満足感と安堵感を得ていた。

ここはもしかしたら地球の乳房なのだろうか？

「ちよつと違うね」

どこかからそんな声が出たような気がした。

「誰だ？」

私は声の主に呼びかけた。

声は洞窟の中で空しくエコーした。まるで声など無用だというように……。

「ここは地球の乳房じゃあない。ぼくらの家さ。客が来るのは極めて珍しいけれどね。いや、そういえばついこの間も君たちの仲間が来たっけ。君たちがここまでやってくるようでは、いよいよぼくよりも長くはないかもしれないな」

声は頭の中に直接響いてくる。

これがテレパシーというやつなのか？

その声は、不思議な落ち着きと威厳を感じさせた。

しかし威庄感はない。むしろ愛情に満ちている。うまく表現できないが、例えば人間が小犬にかける声のような感じかもしれない。ということは、私は、彼らにとっては小犬のように無力で無邪気な存在なのだろうか。

「誰なんだ？」

私はもう一度問いかけた。

今度は声に出さず、心の中で。

相手はやはり心の中に答えを返した。

「誰って言われてもねえ。名前が必要なら、ゴンタでもポンタでも好きに呼んでくれたまえ」

「ゴンタ？ といつても、人間じゃあないんだろう？」

「もちろん」

「霊のようなもの？」

「いや、そうなら素敵なだけけれど、残念ながら肉体は持っているんだ」

なんだか馬鹿げた会話だ……待てよ、私は例の酒の香りによぼせて、酔っぱらっているだけなのかもしれない。

私は極力冷静になろうとした。とりあえず、これが幻聴なのかどうかを確かめるために、耳を澄ませた。

パリパリパリ……。

周囲からかすかに虫が葉を食べるような音が聞こえてくる。これは幻聴ではない。しっかりと鼓膜を通し、音として聞こえてくる。

やはり何かがいる。

私は壁に並んだ穴を見つめた。

音はそれぞれの穴から聞こえてくるようだった。

私は改めて穴に潜んでいるらしい相手に、心の中で話しかけた。

「ゴンタ、あんたは一人なのかい？」

「いや、君のそばに、ぼくらは今、七体存在している。そう、壁に開いている穴が、ぼくらの個室さ。そして君がいるその広い空間がぼくら全員の居間のようなものかな」

「姿を見せろよ」

「まあ、慌てなさんな。御飯を食べてから、ゆつくりとお相手するよ。それに、あまりみつももい肉體じゃあないしね。ぼくらは君たちのように自分を取り巻く環境を変えられるほどの器用な手足は持っていないし、運動能力という点でも、およそお粗末な生物さ」

「だから、こんなところに隠れて棲んでいるわけか」

「まあ、そうも言えるかな。いや、正確に言えば、太古の昔はこの肉體で十分だったんだよ。」

この星はかつてぼくらの天下だった。今のように多種多様な生き物が出現する以前、高温多湿、植物が生い茂るこの星で、ぼくらは栄華を極めていたんだ。食べ物は豊富にあつたし、まだ外敵なんてものもいなかった。だからぼくらの祖先は精神だけを高度に発達させていったのさ。

でも、進化の頂点を極めた生物というのは、いつしか環境の変化に適應するユラギの幅を失っていくんだな。ぼくらのずっと後に栄えた恐竜がそうだったようにね。ぼくらの祖先も、あまりにも精神だけを特殊に進化させてしまい、その後のこの星の変化の中では滅んでいくしかなかった。結局ほぼ全滅し、その死体は地中に埋もれた。ずっと後になって、ぼくらの先祖の死骸をきみたち利用して、この星の環境がまた変わってしまった」

「……石油？ あんたらは石油の元になった生物なのか？」

「そうさ。そしてぼくらの先祖の死骸……つまり石油のおかげで、君たちは今、ぼくらとは別の形で特殊化し、持続性のない、病的

で短命な文明を築いているわけだ。皮肉なものだね」

「あんたらはその古代の地球の主の生き残りってわけか？」

「そういうことだね。こんなジャングルの最奥の地に、ひっそりと生き長らえているわけさ。」

ぼくらは、食べ物も、この植物以外は受けつけられないし、身を守る術も持っていない。数が増えるということは餓死を意味するし、外敵に発見されれば、たちまち滅ぼされてしまう。だから、ぼくらは普通とは逆に、仲間の数を増やさないことによって種を守ってきたんだ。

そして仲間が少ないことや肉体的なハンデイは、精神の力でカバーしてきた。つまり精神の力で他の生物に働きかけて、助けを借りて生きているわけさ。一種の共生関係とでも言おうかな」

「チシツメリ族に食糧を供給してもらい、その代わりに例の酒を与えているわけか。アリとアリマキみたいなものだな」

「そう。この壁面の個室も、彼らに作ってもらったものだよ。そのお礼としてぼくらの分泌液をあげているんだ。でもそれだけじゃあないよ。酒はほんの副産物さ。ぼくらは彼らに本当の幸福とは何かを教えてあげたのさ」

「本当の幸福？　なんだか偉そうな言い方じゃないか」

「そうかなあ……。まあ聞けよ。ぼくらは数や量の優勢ということには興味がない。何かを手に入れたり、何かを支配したり、何かを作ったりということも一切しない。その代わり、君たちがしているよりもずっと複雑な精神交流や快楽を実現しているんだ。言い換えれば、精神活動の質だけが、生きていく上でのよりどころなのさ。」

そもそも、物を作ったり、何かを手に入れたりする欲求というもの、つきつめていけば、精神の快楽へ通じるものなんだ。

人生の究極の目的とは何だと思う？　それは精神の充足感さ。

物質はそのための手段にすぎない。しかも、手段を追求しすぎると、本来の目的はさらに遠のいていくことが多いものだよ。

言ってみれば、君たち人間は、いろいろな形で幸福を追求しているつもりでも、ただの代償行為の段階で四苦八苦しているわけさ。その結果、ゴミだのストレスだの廃熱だのと、余計なものばかりがあふれて、最後には一種自暴自棄の世界観にたどり着く……」

「そんなことはない。物質文明には独立した価値がある。それがあんたらに分からないのだとしたら、道具を利用する喜びを知らないからだろう」

「違うね。物質は手段にすぎないんだ。精神の満足に勝るものはないよ」

「いや……なんだか水掛け論になりそうだな」

「そうだね。それじゃあ、ちよつとだけ教えてあげようか。精神の欲求充足とはどういうことかを……」

次の瞬間、私の脳が、真っ白に発光したかのような衝撃を受けた。

え？ なんなんだ、これは？

あまりにも飛び抜けた快感に包まれたために、最初は訳が分からなかった。脳が、今まで経験したことがないほどの知的快感を感じている。

素晴らしい芸術や思想に出合ったときに感じる知的満足をすべて凝縮し、いっぺんに吸収したような高密度の充足感。肉体が消滅して、精神だけの生き物になったかのような恍惚感……。

そうだったのか……。

この究極の満足感を得るために、人間は経済活動やら創作活動やらの雑多な行動に明け暮れているのかもしれない。

「どう？ 気持ちいいだろ？ 人間の脳も、すべての能力を使え

ばこのくらいのごことは経験できるのに、君たちは生涯、その能力の十分の一も使っていないのさ」

私の負けだった。

私はあまりの驚きと快感で、返事をすることもできなかつた。

「でも、快感ということでは、これだけじゃないよ」

「……というと？」

「今のは精神の快楽。これとは別に、肉体を合わせる快楽というものもある。これも君たちが味わう快感の比じゃないよ。知りたい？」

「も、もちろん！」

私は心の中で上ずった声を上げていた。

「じゃあ、ちよつとだけね」

その声が聞こえると同時に、私が倒れているそばの穴から、ぬめぬめしたものがゆっくりと這い出てくるのが見えた。

表面はグレーとピンクの斑模様。巨大なナマコのようなだが、目や触角のようなものは見あたらない。

太さは三十センチほどはあろうか。長さが一メートルほど。手足のない、サイケ調のオオサンショウウオと言つてもいい。

別の穴からももう一匹（高等生物なのだろうが、やはり感覚的には「匹」と数えてしまう）現れ、二匹が私の前に並んだ。

なぜか気味悪さはまったく感じなかつた。

姿形だけを見ればグロテスクこの上ないのだが、そんな感情を完全に払拭する圧倒的な精神の力を前にして、私はすでに彼らを神々しく見つめていた。

二匹の生物は全身が粘液で包まれていて、壁を這つた後にはナメクジが通つた跡のように光る筋ができた。

いや、ナメクジが残す粘液とは違い、自ら発光する粘液だ。通つた後に残された光の筋は、美しい虹色に輝いている。

私は、これほど高貴な粘液を見たことはなかつた。

「この姿を見れば分かるだろ。ぼくらは君たちのように、運動することによる肉体的快感というものはほとんど味わえない。その代わり、肉体を合わせることにによる快感や一体感は、君たちの想像を絶するものなのさ」

そう言うと、二匹は私の目の前でゆっくり交わり始めた。

巨大なナマコ同士が、複雑に絡み合う。二匹の体からは汗のような液体が噴き出し、床の上に流れ落ちた。巨大なナマコの汗は、床を伝わって中央の凹みに流れていく。あの「酒」の正体はこれだったのだ。

「じゃあ、この快感をほんの少しおすそわけ……」

次の瞬間、私の身体はエビのように反り返った。頭の中が真っ白になるほどの快感……。さつき味わった精神的充実感とは別種類の強烈な快楽。むしろ、精神などひとかけらもないと思えるほどの、純粹で圧倒的な肉体的快感……。

二日酔いの朝、冷たい水を呑み干す瞬間、我慢した小便を思いきり放出する瞬間、あるいはセックスにおける快楽をすべて合わせ、究極まで高めるところで、その快感は潮のようにゆっくりと引

気絶寸前になるところで、その快感は潮のようにゆっくりと引いていった。

「ね。いいでしょ。これも、ぼくらは、君が今感じた数倍の快感を感じているのさ……ウツ……。おっと、失礼……」

「困ったやつだな。いい加減にせえよ」

別の声が私の頭の中で響いた。

その声はこう続けた。

「さて君、どうする？　ぼくらは君をこのままここから帰すわけにはいかないんだ。ぼくらにも自分たちの命を守る権利はあるはずだからね。もし君がここでこのまま死んでくれるのならば、ぼくらは君に最高の快感を与えながら死なせることもできるけれど

……」

それもいいな、と私は思った。

もはや死ぬことは少しも怖くない。

今までいろいろなものを求めても求めても、結局は得られなかった……あの「人間であること」のもどかしさの秘密がようやく分かった気がした。

どうやら人間というものは、潜在能力のごく一部でしか、セックスの快感や知的満足感を得られない生物らしい。

心を求めても、身体を求めても、最後にはどこか満たされぬものが残る。だからこそみんな、何か満たされぬ気持ちのまま死んでいく。

私は今、一生かかっても経験することができない至福感を味わってしまった。もうこれで十分だ。

だが、そういうこととは別の次元で、何か思い残すことがあるような気もした。

それが何かはよく分からない。何なのだろうと考えているところに、再び声がした。

「オーケー、オーケー。分かったよ。君は、自分が生まれ持った幸せをまだ完全には経験していなかったらしい。お馬鹿さんだなあ。分かったよ。そいつを教えてあげよう。

ぼくらを生かしているものたちと身体をぶつけ合い、対話しながら生きていく快感……とでも言おうかな。これだけは、ぼくらはいくら望んでも得られない。こんな狭い洞穴の中で孤立して生きていくわけだからね。羨ましいね、こいつう」

私は今、七匹の高貴なナマコ型生物から、温かな視線で見守られているのを感じていた。

「じゃあね」

「元気だね」

「時々顔を見せなよ」

私は彼らの声を聞きながら、深い眠りに落ちていった。

CHAPTER

「待っていたわ、あなた……」

闇の向こうから、誰かが呼ぶ声がする。

目を開けると、私は高貴な粘液のたまった凹みの中に身体を横たえていた。

上半身を起こすと、懐かしい笑顔が目の前にあった。

「君は……」

「パティよ。パティ・コリンズ。でも昔の名前なんてどうでもいいわ。ほら、私たちはもう、名前なんて使わなくなっちゃって、こうして自由に呼び合ったり、話したりできるんですもの」

笑顔のパティは、唇一つ動かさずにそう言った。

「そうか……。そうだね」

答えた私も、満面笑みをたたえていたに違いない。

私は今、身の回りのあらゆることに幸せを感じられる。

「物」に縛られないということがこんなに気持ちのいいことだと、なぜ今まで気がつかなかったのだろう。

最初の頃は、股間の一物が揺れるのが気になって仕方なかったが、今ではそれもすっかり慣れてしまい、むしろ何かを身に着けることに違和感を覚える。

そしてこの肉体が、この精神が、この世界の中で自由に活動しているということに対する根源的な幸福を感じることができる。

嬉しくて、幸せで、顔は自然にほころんでくる。

私は今まで、人間以外の動物は笑わないと信じ込まされてきた。しかし、それは間違っていた。

動物はみんな笑っている。普段の顔が「笑顔」なのだ。笑顔を忘れていたのは、人間のほうだったのだ。

そして私は今、その失われた笑顔を手に入れた。

△
□
◇

「ダポポポプルルウウ……」

ジャングルの中に奇声がこだました。

聞き覚えのある声だ。

私は、地面から数十センチほどの、ちょうどよい高さのところ
で横に伸びた木の枝をベンチ代わりにして座っていた。

茂みの向こうを、招かれざる客たちが歩いている。

総勢十数人。先導しているのはカルロスだった。

日本とイギリスの合同テレビ取材班。日本人とイギリス人のクルーの他に、背中に撮影機材や食料を積んだ現地人のポーターたちが一列になってこちらに向かってくる。

私は懐かしさを覚えながら彼らを見ていた。

あれからどれくらいの時が流れたのだろうか。暦の感覚というのが薄れているので正確なことは分からないが、一年以上は経ったのだろうか。

「あら、あれはカメラマンのジョージだわ」

隣にいた妻が言った。

言ったといつても、言葉を発したわけではない。彼女の笑顔の中に、そういうメッセージが汲み取れるのだ。

私たちはあのナマコ型生物が出す高貴な粘液の洗礼を受けたおかげで、簡単なテレパシー能力を身につけていた。

かつては見事な金髪だった彼女の髪は、あの生物たちの粘液に浸かってからは焦げ茶色に変色し、縮れていた。膚の色もすっかり黒くなり、もうかつての恋人だったジョージが出合ったとしても、まさか数年前にチシツメリ族の取材中失踪したあの美人生物学者、パティ・コリンズだとは分からないに違いない。

私だって、あの洞窟の中で鼻歌を歌いながら酒を壺に汲んでいた彼女にそんな過去があったなんて、思いもしなかったのだから。そして私もまた、身体つきや顔つきはすっかり別人に生まれ変わっていた。

沢野や横井の前に現れても、まさか私だとは思わないはずだ。

「小高さんの遺骨だけでも見つけられるといいんですけどね」

「無理だろう、そりゃ。こんな広いジャングルの中で、そんなこと望むほうがどうかしてるよ」

そんな会話が、かすかな風に乗って聞こえてきた。

沢野と横井の声だ。懐かしさがさらに倍加したが、彼らが招かれざる客であることに変わりはない。私は妻の肩を抱き、軽く頬擦りした。身体を寄せた途端、並んで座っていた木の枝が折れた。ベリツという大きな音が、彼らの歩みを止めた。

「いたよ！ チシツメリ族ね！」

カルロスが叫んだ。

しまった。見つかってしまった。ビデオカメラがこちらを向き、レンズが光った。

「会いたくなかったのにね」

「そうね」

私は妻と、心で会話を交わした。

「ダポポポプルルウ……」

カルロスが作り笑いをしながら奇声を上げる。

ご苦労なことだ。

でもまあいいか……。こんなに気持ちのいい日だもの、どんな客でも喜んで迎えようではないか。

私はゆっくり立ち上がると、近くについさつき出したばかりで、まだほんのり温かい「友好の印」を、木の葉にくるんで彼らに投げつけた。

(了)

◆底本 『現代の小説 1994』（日本文藝家協会編・徳間書店刊）

◆初出 『小説すばる』 一九九三年七月号